

65

痕跡と今



幹線道路から、直角ではない、微妙な角度で分かれていく道に無性に惹かれる。

それはまず古い道と見て間違いない。その道を行けば、たいてい古い家、立派な大木、神社やお寺、道端のお地藏さまなど、歴史を感じさせる何かに出くわす。

目を凝らすと、そのまちのかつての暮らしを物語る様々な「痕跡」が立ち現われてくる。

古い家の屋根に見られる「水」の字がかたどられた鬼瓦には、火災から守る「火伏」の願いが込められた。古い家の玄関の軒下に打ち付けられた白地に赤い星、真ん中にGの字の丸いホーロープレートは、その家に都市ガスが引かれていることを表している。

六供町にある江戸末期の古民家・石原邸。そこまでの道を半分さえ

ぎるように建つその壁には、無数の横木が打たれ、よく見るとそれらはすべて金具で留められている。これは火事が起きたときに、横木に鳶口と呼ばれる鉤型の道具を引っかけ、壁をひっぺがして延焼を防ぐために取り付けられたものだ。

今となっては、わざわざ「水」の字のついた鬼瓦を屋根に葺く人はいなくなり、Gマークが何を表すのかを知る人は少ない。火事が起きても鳶口で壁を壊されることもないだろう。こうした本来の意味を失った「痕跡」は、まちのそこかしこに点在する。

これらは、現在とある時代との時間の隔たりとともに、考え方や知恵、常識との隔たりを表している。なんで？誰が？どうやって？その違和感や疑問が、信じて疑わない今の「当たり前」を見つめ直すきっかけとなり、次のまちの姿を考える道具となる。

(A)

へたでいい、へたがいい

夏の暑さがとどまるところを知らない中で、今年の夏も北部地域交流センター・なごみにてこどものまち「なごみん横丁」を開催した。

このなごみん横丁とは、子どもたちが自ら考え行動することで自主性や創造性を養うためのイベントで、子どもだけが入ることのできる仮想都市である。子どもたちはこのまちの中でいろいろな仕事をしたり、自分のお店を出したり、稼いだ「じゃん（なごみん横丁の通貨）」でイベントに参加したり買い物をしたりなど、さまざまな遊び方を自分で見つけて楽しんでいる。

なごみん横丁の紹介をしだすと足りないのだが、子どもたちが作成するポスターには毎回感心させられている。さりげなく字が間違っていたり、シなのかつなのか分からなかったり、濃い原色の画用紙に同系色の薄い色で文字を書いていたりと何かとハチャメチャなのに…それなのに完成形をみると溢れんばかりの個性と創造性が感じられるれっきとし

た「作品」になっている。よく聞くフレーズで「へたでいい、へたがいい」というのはまさにこのことだと思う。

同じ内容のものでも、大人が作ると単なる「広報物」に、子どもが作ると「作品」になるという発見はとても刺激的だった。おそらく僕だけではないと思うが、成長するにつれて文書やポスターをパソコンで作るようになり、外に出すものと考えたとフォントが違っていたり大きさにばらつきがあったりすると気になってしょうがない。気づかないうちに「うまくないといけない」「整っていることが美しい」とカチカチの頭になってきているように思う。フリーダムなインスピレーションを思い出したいものだ。

そんな気づきをくれる“画伯”たちの作品は北部地域交流センター・なごみに展示後、岩津商店街のそれぞれの商店に貼っていただくので、ぜひ実感してみてください。

(H)



過ぎゆく夏を思う

今年のお盆は新城で2つのお祭りを見た。初盆の家々を巡り、各家の庭先で念仏踊りを行う大海の放下おどり。長さ3mに及ぶ太い松明を丸抱えて、戦場で亡くなった武田軍を慰霊する信玄原の火おんどり。いずれのお祭りも昔から地域に根付いた死者を弔うもので、決して派手さはなくとも厳かで勇壮なものであった。三遠州には今もこうした念仏踊りが数多く残っている。「家康公夏祭り」や「花火大会」のような賑々しい夏祭りから、供養の盆へと季節は移ろい、いよいよ秋の気配が。四季の変化と共に生きてきた先人を思い、日本らしさに少し触れた気がするひと夏だった。

(K)



最後に選択した商品や行為はどのようなものであっても、その結果に至るまでのプロセスの中で生まれた個人の価値観への気づきや意味を、一つの物語としてステイトメント（表現）する。

まちづくりは「生活芸述」の視点から始まる。

所得10%寄付

たらいの中の水を自分のほうにかき集めようとすると、水はすーっと、逃げていく。でも、向こうへ向こうへ押しやると、今度はすーっと、自分の方へ戻ってくる。これはお金にも言えることで、「たらいの水の原理」というそうです。

私は一人でも多く、この「たらいの水」実践者が増えることを願っています。

だから、まずは私から始めることに決めました。これからは、自分の収入の10%を、必ずどこかに寄付します！

(F)

潜る理由

水が怖い子。泳げない子。僕の子どもも、小さいころ水が怖くて、お風呂で頭を流すことさえも毛嫌いしていた。得意不得意はあると思うけど、なぜ潜らなければならないのか、泳げなければならないのかという理由が、彼にはなかったんだと思う。多少、水に顔をつけられるようになってきたとき、きれいな海へ出かけた。海の水は透き通り、水中には魚が泳いでいるのが見える。

その時、彼は、水の怖さをこえて、そこに広がる世界がみたいと感じた（はず）。今まで躊躇しながら、潜っていた行為から、魚見たさに、潜りに潜る。プールにはない自然の素晴らしさ、感動と喜び。潜れるか潜れないかではなく、潜る理由がそこにあった。こういう気持ちの高鳴りを、まちなかでも子どもたちに味わってもらえるといいなと思う。

(Y)

